

## ワークショップ

### 夏休み子どもワークショップ

#### 「<sup>美、微、っ</sup>ビビッと感じて、じっくり描こう」

7月31日～8月5日（6日間）

10：00～16：00

講師＝内山久子

新田あけみ

脇田千晶

場所＝当館実技室

参加者数＝241名

例年、開催中の企画展に関連したワークショップとなるのが殆どだが、今年のテーマは「田中敦子」（会期：7月28日から9月9日）。そこで今回のワークショップでは、田中の作品世界を「運動＝エネルギー表現」と捉え、動き／エネルギー（生命力）やその伝導を物理的に体験するオリエンテーションと、それを描くための技術を身につける実技を並行して行った。ワークシートを使って展覧会を鑑賞したり、人体の動きや自然の形・色などの観察による視覚的な心理体験を重ねたのは言うまでもない。そして最後に、円と線のモチーフによって全員による作品制作に挑んだ。タイトルの前半にある「ビビッと感じて」は、後半の制作「じっくり描こう」に向けた入念なレッスンとも言えるが、後者が完成目標としてあるのではなく、自己を表現するための動機とツール探し、いわばプロセスを重視した内容を目指した。

1日目 まず子どもたちに運動に関する生理的なショックを与え（暗室で豆球の明かりに触れる、マッサージ器の上にのせたお米の動きを観察してクロッキー、自転車を漕いでライトを点灯させる、オムロン・マッサージ器で筋肉の動きを知る）、次に展覧会を鑑賞して、そのスケールの大きさ、基本のモチーフ、動きやエネルギーなどの要素について知ってもらおう盛り沢山の初日。

2日目 大騒ぎだった前日から一転して、静かな制作日。運動や成長の様子を描いたり、あるいは色彩の変化を体験。まずは「ジャックと豆の木」の語りで成長のイメージを膨らませ、それをフォルメン線描やぬらし絵で表現。各自の集中力と想像力が試された一日でもあった。

3日目 前日の制作を鑑賞した後、二つの新しいワークに挑戦。顔料を入れたシャボン玉液を画面に定着させる実験の後、やはり顔料入りのヨーヨーをビニールシートにぶつけて、にわか嶋本昭三に变身！興奮覚め

やらぬ中、田中さん以外の作品をスライド上映し、再度色と形の認識へ導きました。この頃になると、円形に敏感なだけでなく、他の形や線の動き、色に関する関心がとても深くなっていった。いちばん笑いを誘ったのが、イヴ・クラインのヌード・パフォーマンスの写真だったのは、子ども故だろうか。

4・5日目 実技室と講座室を、それぞれ巻ダンボールとビニールシートで養生し、円と線による絵画制作を行った。題して「Round on Ground」。勿論、田中の「Round on Sand」のパクリである。靴下や軍手を丸めて絵具をしみ込ませ、床に転がして痕跡を残したアクション・ペインティングもあった。

最終日 講座室で制作したビニールシートを実技室に運び、6日間すべてでの制作で埋め尽くされた実技室は壮観そのもの。

ワークショップには、大別すると二つの手法があるように思われる。ひとつは、テーマのみを与え、あとは全く参加者の自由に任せるやり方。もうひとつは、目標を設定し、それに向かってメニューをきっちり詰めるやり方。今回のワークショップは、6日間という短い限られた時間の中で、いかに子ども達の創造力を引き出し、それを表現させるかという問題意識から、後者の方法を選択した。少ない経験知の中で、今度どのように前者の方法にトライするかが今後の課題である。

### 「粘土ワークショップ - 学校のためのプログラム - 」 講師＝石上和弘（彫刻家）

5 / 29	清水市立辻小学校 3年	54名
5 / 29	静岡市立南藁科小学校 3年	37名
6 / 26	清水市立辻小学校 4年	63名
6 / 26	静岡市立南藁科小学校 6年	38名
6 / 27	静岡市立中田小学校 4年	61名
6 / 28	清水市立辻小学校 5年	69名
7 / 3	静岡市立中田小学校 4年	61名
7 / 3.4	清水市立有度第二小学校	136名
9 / 11	静岡市立中藁科小学校 3年	27名
9 / 12	静岡市立豊田小学校 4年	109名
9 / 13	静岡市立中藁科小学校 5年	26名
9 / 14	清水市立飯田東小学校 5年	97名
計		778名

## 移動子どもワークショップ

### 概要

このワークショップは、静岡県を伊豆・東部・中部・西部の4地域に分け、平成13年5月から10月の間に、31校の小学校を巡回し粘土のワークショップを行うものである。現地での運営は、美術館から派遣する専門の講師陣が行い、必要となる粘土（約1t）や養生用の資材も輸送する。

このワークショップを開催することにより、粘土に親しむと同時に彫塑を原形にして造られたブロンズ彫刻を理解する一歩として役立ていただくことと、もうひとつはなかなか県立美術館まで来ることが出来ない遠隔地の子ども達に美術館を紹介する役割を果たすことを目的とした。

### 事前アンケートの結果

参加校を決定する資料として、前年度の11月に「移動子どもワークショップ - 受け入れに関する事前調査」を、県下552小学校に行い、289校から受け入れできる旨回答をいただいた。その中から各地区7校程度を選定し、31校の巡回先を決定した。

- A = 受け入れできる
- B = 関心はあるが受け入れできない
- C = 受け入れできない
- D = 未回答

### 巡回日程

	A	B	C	D	合計
伊豆	49	15	4	6	74
東部	64	32	3	16	115
中部	101	61	6	31	199
西部	75	46	16	27	164
合計	289	154	29	80	552

巡回日	小学校名 (巡回順)
5 / 1 - 2	南伊豆町立南中小学校
5 / 7 - 11	東伊豆町立稲取小学校
5 / 14	松崎町立中川小学校
5 / 15 - 18	戸田村立戸田小学校
5 / 21 - 25	伊東市立宇佐美小学校
5 / 28 - 30	韮山町立南小学校
5 / 31 - 6 / 1	熱海市立伊豆山小学校
6 / 4 - 7	沼津市立香貫小学校
6 / 11 - 12	三島市立西小学校
6 / 13 - 15	裾野市立西小学校

6 / 18 - 19	御殿場市立印野小学校
6 / 20 - 22	富士市立須津小学校
6 / 25	富士宮市立上井出小学校
6 / 26 - 29	富士宮市立貴船小学校
7 / 2	清水市立西河内小学校
7 / 4 - 9	静岡市立川原小学校
7 / 10 - 17	清水市立飯田小学校
9 / 4 - 5	東海大学付属小学校
9 / 6 - 7	大井川町立大井川西小学校
9 / 10 - 14	焼津市立焼津東小学校
9 / 17 - 21	榛原町立川崎小学校
9 / 25 - 26	菊川町立加茂小学校
9 / 27 - 28	小笠町立小笠北小学校
10 / 1 - 2	佐久間町立浦川小学校
10 / 4 - 5	森町立天方小学校
10 / 9 - 10	袋井市立高南小学校
10 / 11 - 12	磐田市立磐田西小学校
10 / 15 - 19	浜松市立篠原小学校
10 / 22 - 26	新居町立新居小学校
10 / 29 - 30	浜北市立麗玉小学校
10 / 31	引佐町立渋川小学校

### 移動子どもワークショップに対する反響

5月1日、南伊豆から始まった移動子どもワークショップは、10月31日、愛知県との県境に近い引佐町で終了した。報告者も、数校の移動子どもワークショップに参加し子ども達の活動の様子と、先生方の現場での声を聞いてきた。また、参加者と先生方にそれぞれアンケート調査も行い、今回の事業についての反響をまとめてみた。こうした現場での様子と、体験後のアンケート調査まとめてみたいと思う。

まず、子ども達の反応だが、大変良好である。休み時間になると、これから参加するクラスや、残念ながら今回は参加できなかった子ども達が会場まで覗きに来る姿はなくなることはなかった。教員アンケートからは、「子ども達は、かなり楽しみにしていました。最初は戸惑っていましたが、徐々に楽しみ始め、ついにはいつものように行き過ぎてしまったようです。」のように、子ども達は粘土が前の学校から運ばれてくるのを、とても楽しみにしてくれていることがわかる。

また、「とても意欲的に取り組んでいた。」「発想も広がり、活動が停滞することはなかった。」や「夢中で取り組んでいた。」「楽しそうに歓声を上げていた。」「表情が喜びに満ちていた。」などからも分かると思うが、活動中の子ども達の表情は、どの子も生き生きとしており、目を輝かせ取り組んでいた。

それは、普段学校では味わえない体験をしたからに他ない。「ふだん、授業で落ち着かない子が、真剣に取り組んでいた。五感を思う存分使えて、刺激的だったのだらう。」「心がだんだん開放されていく様子がわかりました。手を動かす、体で感じるという人間の本能を感じました。」「いつもと違った粘土に対して、とても興味を持っていました。普段はあそこまで思いっきり出来ないで、とても伸び伸びとした姿が見られました。」など、美術館ならではのプログラムが、子ども達にこれまでにない粘土との触れ合いを提案し、それを子ども達が体全体で受けとめてくれた様子が伝わってくる。

「2時間+清掃の時間まで、子ども達の意欲が落ちることなく、最後まで楽しく取り組めることが出来、すごいなと思った。」「とても反応が良かったです。日記に書いてくる子も多かったです。」「既に、次ぎはいつ来てくれるの。と言ってくる子もいます。」など終了後もとても良い反応で、帰りがけにわざわざ立ち寄って、「ありがとう」と行ってかえる子ども達の姿を報告者は何度も見送った。

次に、先生方の反応をまとめてみた。先生方の反応は大きく四つに分かれる。

一つ目は、学校まで出張してきてくれたことへの反応である。「本校は6年間を単学級で過ごしますので、どうしても他との交流が少なくなりがちです。また、地域環境が幹線道路から外れていることもあり、昔のままの自然は多くありますが、文化的な環境はかなり少ないのではと思います。貴館が実施して下さるワークショップは大変ありがたいチャンスです。」「美術館と学校の距離が一步近づいたように思います。」このように、先生方は美術館と学校の距離を非常に長く感じていることがわかる。それは地理的理由に加え財政上の理由もある。そうした中で、美術館が出向き、無料でワークショップを行うことはこれまでなく、画期的なことと受けとめられているようである。

二つ目は、学校現場ではできないことをしてくれたという反応である。「子ども達が持っている粘土の量ですと表現できるものに限りがあり、発想が広がりにくいので、大量に粘土に触られるこの企画はとても面白そうだと思います。また個人の持ち物なので、子ども同志の粘土を繋げることが出来ないという事情もありました。」「子どもは『手の中』でしか粘土を感じたことがありません。自分の経験からも是非体一杯粘土を味わって欲しいと思います。」このように、学校では出来ないダイナミックな内容ができたという反響

もとても強く感じている。

また、「専門的な技能を持った方々の指導で日常の学校教育ではやり得ない、また考え付かないような美術館ならではの諸活動を展開していただきたく思います。」「私たち教師にとっても、専門の講師の方々と直接触れ合うことが出来、よい勉強になります。」など、NHKの『ようこそ先輩』のようなことを期待し、感じているというのが三つ目の反響である。

四つ目は、感性を育む内容が素晴らしいという意見である。「初めこそ『何するんだろう』と緊張した様子でしたが、『はい、まず粘土と挨拶をしましょう』となった瞬間から後、ずっと楽しそうでした。」「大喜びでした。いつも見せない驚きや、声が聞こえました。体を使ってやることで、心が自由になった様子でした。」このように、知育に偏りがちな現場での教育に対し、五感を使って体感する内容が非常に快く受け入れられている様子が分かる。

このように、移動子どもワークショップは子ども達や先生方にも大変好評である。10月までに31校を巡回し、約8000人の子ども達に体験してもらったが、事前調査で希望有の回答は289校であった。したがって、今回実施できた学校は希望数の10パーセント程度にしすぎない。是非定期的に続けて欲しいという希望は強いが、単年度事業のため芳しい回答が出来ないでいる。来年度からは、移動美術展の開催地で実施しては見てはという案が浮上している。今回のような大規模な事業は出来ないが、こうした要望に出来る限りこたえていきたいと考えている。

#### 「静岡県立美術館移動子どもワークショップ」現場からの報告

館内の実技室で行われている粘土のワークショップが好評なのを受けて、今年度その出前版？を実施！5月から夏休みを挟んで10月まで、県内津々浦々、31の小学校に8000人を越える子供達を訪ねていった。

5月1日伊豆は下田の南中（みなみなか）小学校朝7時、校庭を横切りながら「はじまりはじまり」と心の中で拍子木を打つ。その手に粘土と書かれたのぼりを持っているわけでもないが、どこか懐かしい旅回りの一座をだぶらせている。“何やら楽しそうなものがやって来る”と。

図工室にシートをひき詰める。1tの粘土（今回主役に抜てきしたことは一座の親分から伝えてはあったが、これから続く長旅は知る由もない）に「待ってました」とばかりに飛びついた子供達。「こんなにたく

さん粘土を見るのは初めて」と言って、身体を使って質感や重さを楽しんでいる。次は足で広げた粘土の上で黙想（10秒！）、はやる気持ちを落ち着かせるのだ。このあたりで美術館の事にも触れる。あまり知名度はない。でも来たことがある子供達もいたのは嬉しかった。そうしてこちらから提示したアイデアを切っ掛けにして、自分でつくったものが周りと繋がってシートいっぱい広がってゆく。それを大きく環になって鑑賞をする。驚きを持って歓声上がる。自分達の作ったものに吃驚しているのだ。粘土の良いところはほぼ苦手意識が発生しないこと、つまり自己の伸び伸びとした表現が、コミュニケーションの手段となっている点にある。とても健康的な事であるし、建設的な自己形成にも一役買っていると考えるのは大袈裟でもないと思っている。最後に掃除、粘土の養生をする。次の回への準備である。これに校長先生自ら腕を捲り参加していただいたことが幾度あったことは、このワークショップへの関心の高さを物語る一例だろう。熱心な先生方のサポートがよりよいワークショップを作り出していった。

基本的には館内の実施例をなぞっていったわけだが、回を追うごとにその内容の発展を目指した。それは主役自身の豊かな可能性を、子供達とのコミュニケーションの中から新たに引き出すことが出来れば、“より有効な出来事”になることに確信があったからだ。それはわれらスタッフが毎回新鮮な気持ちを持って子供達に接するのにも有効に作用することとなった。

10月31日遠州は引佐の渋川小学校体育館、ここに木の棒を芯にして5mを超える粘土のタワーが出現した（5月の段階では想像できなかった事）。全校児童40名足らずのこの小さな小学校で、無事ワークショップがすべて終了したことを、そのタワーから感謝を込めて発信した。

ワークショップインストラクター

石上和弘（彫刻家）



足で広げた粘土の上で黙想10秒！



自分でつくったものが周りと繋がってシートいっぱい広がってゆく